

山田賢先生を送る

岩城高広・米村千代

2025年3月、山田賢先生が定年を迎えられます。先生は1993年の着任以来、32年あまりにわたって、学部ならびに全学の教育・運営業務等に多大な貢献をされました。詳しくは職歴をご覧いただきたいのですが、主なものをあげても、2009年には評議員、副理事、2011年からは文学部長、そして2017年から理事、2021年からは人文公共学府長を歴任されました。文学部長時代の2016年には、学部改組を指揮し、現在の文学部の組織・教育課程の基礎を築かれました。また、学習管理システム（Moodle）の導入や文部科学省の卓越大学院プログラム「アジアユーラシア・グローバルリーダー養成のための臨床人文学教育プログラム」獲得（2019年）など、全学的な教育の充実、研究基盤整備にも尽力されました。小文は、山田先生の研究や大学での業務について、その幅広いお仕事の一端にはなりますが、あらためてみなさまにご紹介するものです。前半を岩城（歴史学コース）が、後半を米村（行動科学コース）が分担して執筆しました。ただ、前半と後半とで内容や表記の調整はおこないませんでしたので、読みにくいところがあるかもしれません。ご海容いただければ幸いです。

＊＊＊

はじめに、山田先生の研究や教育について紹介します。執筆にあたって、インタビューの機会をいただきました（2024年9月）ので、そのときのお話もまじえつつ述べたいと思います。

山田先生のご専門は、明清時代を中心とする中国近世の社会史です。中国史との出会いについてうかがったところ、「偶然です」というお答えでした。しかし学生時代、中国文学者でもあった高橋和巳の作品（『邪宗門』など）を読みふけったそうです。やはり中国との出会いは必然だったのかもしれません。このほかには、「社会史」と呼ばれる分野、レビィ・ストロースらの

構造人類学にも関心をもち、また日本の歴史学者としては、中世史の網野善彦や勝俣鎮夫（『一揆』）などの作品に触発されたとのことです。

16世紀以降の中国では人口の増大傾向がつづき、相対的に人口が少なかった内陸部を、人びとは新たな生活の場としていきました。山田先生は、人びとの移住の歴史という側面だけではなく、人間の社会がどのように形成されるのか、という根源的な問いをたずさえて、このフロンティア社会を研究対象としました。すなわち、四川省雲陽県をひとつの壮大な「実験場」に見立て、人びとの結びつき、社会の秩序というものがいかにして生成され、展開・変容していくのかを観察、分析されたのです。

同郷結合から同族結合への展開、そして地域エリートの生成と、フロンティアにおける統合、変動の過程については、著書『移住民の秩序』のなかで明らかにされています。ここでは先生が、その観察の過程で着目したものとして、秘密結社について付言したいと思います。いわゆる村落共同体をもたない中国社会においては、相互扶助組織としての秘密結社が重要な役割を果たしますが、故郷を離れて新開地にやってきた人びとにとって、秘密結社という存在は不可欠のものでした。山田先生は人びとがどのような信仰・信念をもって結びつくのかという問い合わせをたてて、入会儀式やメンバーどうしの符牒などを克明に描写し、その意味世界にわけていきます。そして社会のありようや救済の思想を説く秘密結社が、人びとにとっての結節点となつたことを明らかにしました。べつの著書『中国の秘密結社』では、これをさらに通時的にとらえ、「秘密結社としての中国共産党」という興味深い歴史像を示しています。

日本という位置から巨大な文明世界である中国を見つめる山田先生のご研究は、多くの先学もそうであったように、歴史認識をめぐる問題など現実的な課題とも結びついています。日本の対中国認識や東アジア比較史についての研究も、先生はつみかさねてこられました。最近では、江戸期の日本人が著した文献にみられる中国觀をテーマとした論考を発表されています。

さて、これは教育面にもかかわることですが、山田先生にとって歴史学とはどのようなものなのでしょうか。先生は、歴史学とは他者理解の技法であるとおっしゃっています。グローバル化の時代であればこそ、文化的・歴史

山田賢先生を送る

的背景にまで目を向けて相手を理解する必要性があります。中国と日本を例にあげれば、それは同文同種という思い込みもふくめて無理解の歴史でもあったと先生はおっしゃいます。それを乗り越えるために歴史的な視点をもつことは「異なった歴史的背景をもつ人々が接触する場合の無用の軋轢を回避して、理性的な会話を成立させるための基礎である。すなわち、歴史的な発想こそ現代的な要請に叶う」（「歴史学は必要か？」）と。この言葉は、歴史学のみならず人文科学全体に通じることでしょう。その意味で、文学部の存在が薄れることはありません。山田先生は、あの世代のためにも、文学部という組織の重要性・必要性を述べておられました。

人間のいとなむ社会に向けられた根源的な問い、それを解明するための緻密な観察と分析、異なる価値観を有する人びとの深い理解は、研究面だけにあてはまるものではなく、山田先生が大学においてさまざまな役職に就かれた際にも生かされたのではないか、諸課題に直面して発揮された豊かな発想や適切な手法にもつながっていたのではないかと想像します。

史料を徹底して読みこむことが、歴史学の基本であると同時に、上述した「他者理解の技法」にも通じていると考えれば、山田先生は、漢籍を用いた授業を一貫してつづけることにより、他者理解の教育を実践してきたといえるでしょう。また、かつて普遍教育で、先生を世話人として「千葉大学の研究・教育」（2011～13年度）という当時の学長、理事、学部長らによる授業が開講されました。シラバスには「みなさん自身の所属する学部以外の学部でどんな研究・教育が行われているか知っていますか？」という文言が見えます。身近な他者を理解する機会を、学生たちは得たことでしょう。最後に個人的なことになりますが、山田先生が指導した学生の論文を読んでいると、先生の文体を彷彿させる書きぶりに出会うことがあります。先生の魅力はこんなところにもあらわれるのかと感心するとともに、うらやましい気持ちになりました。

いよいよ退職かと思うと、残念な気持ちです。退職後も研究者としては、これまで以上に精力的にお仕事をされるようで、日本の中国イメージ、家族社会史などについて研究成果を発表していきたいとのことです。先生の新たなお仕事に期待したいと思います。

* * *

ここからは、山田先生の運営業務面におけるお仕事を紹介します。先生は、2009年に評議員、副理事および普遍教育センター副センター長に就任されて以降、2011年からは文学部長を3期6年、理事を4年、人文公共学府長を2年、副学長を2年務められました。評議員としては、教育研究業議会に通算14年間出席されたことになり、また、2017年4月から8年間にわたって人文社会科学系教育研究機構長をなさっていました。年数と役職だけを見ても、これほど長い間、管理運営の仕事を担い続けた人は先生をおいて他にはいないでしょう。ただし、この文章だけを読んだ人が、先生のことを役職好きの権威主義的な人物だと思ったとしたら、それは大きな間違いであることを急いで付け加えなくてはいけません。先生は文学部と執行部の間に立って、時に孤独に、言うべきことを言い続けてきた人です。

こうしたお姿に最初に接したのは、先生の学部長時代、学長と部局との懇談会の際でした。先生は、文学部の教員の研究力の高さや学部入試倍率が一貫して高水準であることを、会の冒頭から毅然とした態度で普段の穏やかな口調とは違う強さで話し始めました。当時は、文系学部は一般教育だけを担えばよいという意見や、文系は私立大学に任せておけばよいといった意見がくすぶり続けていた時期でもあり、そのような状況下にあって、先生は具体的なデータに基づいて文学部の重要性をとうとうと述べられました。

人文科学を軽視する見方や風潮に対して立ち向かうために、先生がつねに時間をかけて周到な根拠資料を準備されていたことも、具体的なエピソードとともにここに記しておきたいと思います。例えば、2012年から13年にかけて、ミッションの再定義を定めた際のことです。先生は、他の国立大学のデータを集め、大学間で比較対照し、千葉大学文学部の重要性の論拠として準備していました。先生の後任として文学部長になって数年が過ぎ、学部長室の過去の資料を整理していく、分厚い資料に遭遇した時にはじめてそのことを知りました。先生は、普段からあまり他の人に仕事をふらず雑用も含め何もかも自分でされるので、この資料も誰に言うでもなくおそらく一人で作られたに違いありません。細かくマーカーが引かれている膨大な資料を目の当たりにして、日々の管理職業務の傍ら、ここまで時間と労力を割いて周

山田賢先生を送る

到に資料を検討されていたことに驚嘆しました。

さらに特記すべきこととして、文学部の改組があります。文学部は、2016年に4学科から1学科4コースに改組されました。この改組は、全くの外在的要因によって急遽迫られた異例の改組でした。部局と本部の間で短期間の難しいやりとりがあった末に、文学部はコース別入試を維持することを条件に1学科制を受け入れる決断をしました。当時、学部長だった山田先生は、部局と本部の緊迫した空気の間にあって、おそらくほぼ数日で改組案を書き上げたのではと思います。後日、先生から、ミッションの再定義以降、学内外において改革を求めるプレッシャーを常日頃から感じていたので、他大学の改組やカリキュラム改革の情報収集は欠かさず行っていたとうかがいました。

4年間の理事の就任中にもいくつもの大きな仕事をされました。なかでも人文系として全国で唯一、卓越大学院プログラムに採択されたことは大きな功績の一つです。このプログラムには、岡山大学、熊本大学、長崎大学、国立歴史民俗博物館との連携、そして産業界との連携が織り込まれていました。連携の推進に際しては、先生が中国史の専門家として国内外で構築されてきたネットワークや信頼関係が大きな役割を果たしました。理事の任期中には、ほかにも、コロナ対応をきっかけにteamsを導入するなどオンライン会議システムの情報基盤整備を行い、千葉大学基金（当時はSEEDS基金）に1億円を超える寄附を集め、2億円規模の学生支援事業を実現させました。弥生保育園の移転にも取り組まれました。

学部や大学院だけでなく、先生が普遍教育に力を注がれていたことも記しておきたいと思います。今日、LMSとしてすっかり本学に定着したmoodleを最初に導入されたのも、普遍教育副センター長であった先生です。また、管理職を歴任しながら、普遍教育の500人を超える規模の授業を担当し続けていらっしゃいました。

普遍教育から学部、大学院すべてにわたって先生は千葉大学の教育に貢献されてきました。学長選において2度にわたって立候補を請われ、全学の教職員から大きな支持を集めたのも、先生のお人柄と部局を越えた貢献ゆえのことといえます。特に2023年度に実施された学内意向聴取においては、

先生がトップの票を得ました。ここでは、先生のお人柄があらわれているエピソードを一部紹介します。先生を支援するために作成したパンフレットには、人を大切にする組織づくり、所属部局や教員・職員の境界を越えた協働という指針が掲げられています。このパンフレットは人文科学研究院の有志（子葉会）が編集し、全学の推薦人の方々からのメッセージと顔写真を掲載しました。実は、メッセージを集めるために入稿までにわずか数日しか余裕がなかったのですが、われわれの心配をよそに、忙しい立場にある方々から瞬く間に次々とメッセージが届いたのでした。「人を大切にする組織づくり」というフレーズ通り、共に培ってこられた時間や経験が先生への信頼となり、そして先生を支えていることがうかがえます。メッセージには、生きた言葉で話し合うことを厭わないリーダー、人に会い、顔を見て、直に話すことを実践し、対話が紡ぎだす相互信頼関係を重んじるとあります（大峰真理氏のメッセージより抜粋）。まさに先生の姿を捉えた表現です。

歴史学者として重視されてきた他者理解の技法、すなわち異なる立場や背景をもつ人びとと対話し深く理解することは、先生が学内外においてさまざまな連携を新たに構築された際にも存分に活かされたことがうかがえます。

先生のご貢献について、ここで紹介できることはほんの一部で、まだまだ書ききれないことがたくさんあります。どうしたら、どのような志をもってしたら、一人の人間にここまで仕事ができるのか、われわれの想像をはるかに超えています。その存在の大きさゆえに、先生をお送りする今の気持ちをあらわす言葉が思い浮かばないし、残される不安と向き合う自信もありません。

拙い表現ではありますが、働き続けてこられた先生のご健康と、そして何よりお幸せを心からお祈りしています。そして、これからもご助言やご指導をお願いする次第です。先生の代わりはいないし、先生から学んだことは研究においても教育においても数えきれないのですが、大学人として大学が人を育てる場であり、人を大切にする組織であるべきであるということは忘れないでいたいと思います。

山田賢先生 略歴

学歴

- 1960年1月 愛知県津島市に生まれる
1978年4月 北海道大学文I系入学
1983年3月 北海道大学文学部卒業
1983年4月 名古屋大学文学研究科史学地理学専攻博士前期課程 入学
1985年3月 名古屋大学文学研究科史学地理学専攻博士前期課程 修了
1985年4月 名古屋大学文学研究科史学地理学専攻博士後期課程 進学
1987年9月 南京大学歴史系高級進修生（国際交流基金派遣留学 1988年7月まで）
1989年3月 名古屋大学文学研究科史学地理学専攻博士後期課程 修了（博士（文学））
1989年4月 名古屋大学文学研究科大学院研究生（1990年3月まで）

職歴

- 1990年4月 北海道大学文学部助手に採用（1993年3月まで）
1993年4月 千葉大学文学部助教授に昇任
2004年4月 千葉大学教授文学部に昇任
2007年4月 千葉大学文学部史学科長（2008年3月まで）
2008年4月 千葉大学普遍教育センターに配置換え
2009年4月 千葉大学教授文学部に配置換え
2009年4月 千葉大学評議員に併任（2021年3月まで）
2009年4月 千葉大学副理事（生涯教育）（2011年3月まで）
2009年4月 千葉大学普遍教育センター副センター長（2011年3月まで）
2011年4月 千葉大学文学部長に併任（2017年3月まで）
2011年4月 千葉大学学長特別補佐（2012年3月まで）
2016年5月 千葉大学アカデミック・リンク・センター兼務（2017年3月まで）
2017年4月 千葉大学理事（広報・情報）（2021年3月まで）
2017年4月 千葉大学人文社会科学系教育研究機構長に併任

2021年4月 千葉大学教授人文科学研究院

2021年4月 千葉大学大学院人文公共学府長に併任（2023年3月まで）

2022年4月 千葉大学副学長（教育・産学連携）（2024年3月まで）

2022年4月 千葉大学評議員に併任（2024年3月まで）

山田賢先生 研究業績一覧

1. 単著書

- 1) 『移住民の秩序—清代四川地域社会史研究』(名古屋大学出版会、1995年、315頁)、のち中国語訳が、曲建文訳『移民的秩序—清代四川地域社会史研究』(国家清史編纂委員会・編訳叢刊) 中央編訳出版社、2011年) として出版される。
- 2) 『中国の秘密結社』(講談社、1998年、254頁)、のち中国語訳が、王在琦訳『中国秘密結社真相』(台湾実業、2002年) として出版される。

2. 共著書

- 1) 『アジア史からの問い アイデンティティー複合と地域社会』(史学会編、山川出版社、1991年、担当部分「中国移住民社会における地域秩序の形成—四川省・一八~二〇世紀」200-229頁)
- 2) 『社会経済史学の課題と展望 (社会経済史学会創立60周年記念)』(社会経済史学会編、有斐閣、1992年、担当部分「中国史における人の移動と社会変容」345-355頁)
- 3) 『明清時代史の基本問題 (中国史学の基本問題 4)』(森正夫他編、汲古書院、1997年、担当部分「長江上流域の移住と開発」445-469頁)
- 4) 『歴史と真実』(中村政則、三宅明正ら9名との共著、筑摩書房、1997年、担当部分「「中国」という恐怖—近現代日本の中国認識をめぐって」121-147頁)
- 5) 『東アジア・東南アジア伝統社会の形成 (岩波講座世界歴史 13)』(岸本美緒編、岩波書店、1998年、担当部分「地方社会と宗教反乱—18世紀中国の光と影」269-292頁)
- 6) 『伝統中国の地域像』(山本英史編、慶應義塾大学出版会、2000年、担当部分「生きられた「地域」—丁治棠『仕隱斎涉筆』の世界」251-287頁)
- 7) 『流動する民族』(塚田誠之他編、平凡社、2001年、担当部分「移住民の定住化と「宗族」—四川省雲陽県涂氏」23-40頁)
- 8) 『歴史の中の差別』(三宅明正・山田賢編、日本経済評論社、2001年、

- 担当部分「差別の歴史的文脈について—「支那」という呼称」235–245頁)
- 9) 『結社が描く中国近現代（結社の世界史 2）』（野口鐵郎編、山川出版社、2005年、担当部分「新しい救済世界の出現を 白蓮教/清茶門教」50–66頁）
 - 10) 『ユーラシアと日本 いまなぜ国民国家か—国民国家の過去・現在・未来』（シンポジウム報告書、2009年、担当部分「近代中国における「家族」と「国家」—流動する社会における忠誠のゆくえ」72–78頁）
 - 11) 『東アジアの政治文化と近代』（深谷克己編、有志舎、2009年、担当部分「「民族主義」の記憶と「秘密結社」—中国近代史における「民族」の生成」38–57頁）
 - 12) 『国民国家の比較史』（久留島浩・趙景達編、有志舎、2010年、担当部分「「宗族」から「民族」へ—近代中国における「国民国家」と忠誠のゆくえ—」115–136頁）
 - 13) 『世界戦争と改造：1910年代（岩波講座東アジア近現代通史 第3巻）』（和田春樹他編、岩波書店、2010年、担当部分「辛亥革命と「アジア主義」」184–202頁）
 - 14) 『身分論をひろげる（〈江戸〉の人と身分 5）』（深谷克己・大橋幸泰編、吉川弘文館、2011年、担当部分「中国における「士」と「民」」128–155頁）
 - 15) 『比較史的にみた近世日本—「東アジア化」をめぐって—』（趙景達・須田努編、東京堂書店、2011年、担当部分「東アジア近世化の比較史的検討」266–283頁）
 - 16) 『民衆反乱と中華世界』（吉尾寛編、汲古書院、2012年、担当部分「秘密結社と「アジア主義」—近代日本の中国認識をめぐって—」279–302頁）
 - 17) 『総合研究 辛亥革命』（辛亥革命百周年記念論集編集委員会編、岩波書店、2012年、担当部分「“善”と革命」145–168頁）、英語訳：““Shan (Goodness)” and Revolution,” *The Journal of Contemporary China Studies*, 3(1), 2014. 中国語訳：顧長江訳「“善”与革命—清末民初的四川地方社会」『新史学』10、2019年
 - 18) 『移動と革命 ディアスポラたちの世界史』（小沢弘明・三宅芳夫編、論創社、2012年、担当部分「「革命」の夢の受容—エドガー・スノウ『中

- 『国の赤い星』一』206-209頁)
- 19)『歴史学のアクチュアリティ』(歴史学研究会編、東京大学出版会、2013年、担当部分「討議　社会史研究と現代歴史学」(保立道久、荒木敏夫、服藤早苗、深谷克己、山田賢、北村暁夫、池亭、大門正克、小野将による討議記録) 149-184頁)
- 20)『さまざまな戦後(講座東アジアの知識人 第5巻)』(趙景達・原田敬一・村田雄二郎・安田常雄編、有志舎、2014年、担当部分「竹内好一「中国」という夢」106-121頁)
- 21)『書物のなかの近世国家 東アジア「一統志」の時代』(小二田章・高井康典行・吉野正史編、勉誠出版、2021年、担当部分「清末民国期の地方志編纂—地域と宗族を記録すること—」260-266頁)

3. 論文

- 1)「清代の移住民社会—嘉慶白蓮教反乱の基礎的考察—」『史林』69巻6号、1986年、50-89頁
- 2)「移住民社会と地域変動—四川省雲陽県における嘉慶白蓮教反乱—」『名古屋大学東洋史研究報告』12、1987年、26-58頁
- 3)「清代の地域社会と移住宗族—四川省雲陽涂氏の軌跡—」『社会経済史学』55巻4号、1989年、60-93頁
- 4)「嘉慶白蓮教反乱の思想—白蓮教宗教儀礼解析試論—」『史潮』新26号、1989年、63-79頁
- 5)「旧中国における同族結合・同郷結合に関する覚書—四川省雲陽県訪問記—」『史朋』23、1989年、18-36頁
- 6)「「紳糧」考—清代四川の地域エリート—」『東洋史研究』50巻2号、1991年、58-82頁
- 7)「中国社会と秘密結社—その生成の原理」『しにか』66、1995年、15-22頁
- 8)「世界の破滅とその救済—清末の〈救劫の善書〉について—」『史朋』30、1998年、32-41頁
- 9)「「官逼民反」考—嘉慶白蓮教反乱の「叙法」をめぐる試論」『名古屋大学東洋史研究報告』25、2001年、265-280頁

- 10) 「記憶される「地域」—丁治棠『仕隱斎涉筆』の世界」『東洋史研究』62卷2号、2003年、60-87頁
- 11) 「清末湖南の反キリスト教運動と「正しさ」の系譜」『アジア民衆史研究』11集、2006年、22-33頁
- 12) 「戦乱と記憶—『仕隱斎涉筆』に見る清末社会」『史朋』42、2009年、1-11頁
- 13) 「日本近世における漢籍輸入と「経世」思想」『日本思想文化研究』2卷2号、2009年、8-25頁
- 14) 「東アジアの近世—清代中国の秘密結社について—」『七隈史学』13、2011年、1-7頁
- 15) 「革命イデオロギーの遠い水脈—清末の「救劫」思想をめぐって—」『中国—社会と文化』26、2011年、32-49頁
- 16) 「近世中国における宗族と地域秩序」『歴史の理論と教育』135・136、2011年、23-34頁
- 17) 「生成する地域・地域意識—清末民国初期中国の華中南地域を中心に—」『歴史評論』746、2012年、43-58頁
- 18) 「「支那」と「皇国」—幕末の儒学者・齋藤拙堂の中国認識と自國認識—」『千葉大学人文研究』51、2022年、133-165頁

4. 雜纂

- 1) 「清代白蓮教反乱儀礼解析試論—近代中国民衆運動への屈折と展開」『近代東アジア民衆運動における「連続」と「転換」』1994~95年度科学硏究費補助金 一般研究(C)研究成果報告書 研究代表者趙景達、1996年、3-28頁
- 2) 「清末四川の紅灯教反乱—近代民衆運動と原初的ナショナリズム」(同上、29-59頁)
- 3) 「中国近世社会における「善書」と秩序意識」『三島海雲記念財団研究報告書』35、1998年、74-76頁
- 4) 「中国学最前線：近世史」『しにか』104、1998年、120-121頁
- 5) 「歴史学は必要か？」『千葉史学』83、2023年、4-5頁

5. 研究動向紹介・書評等

- 1) 「書評 三石善吉著『中国の千年王国』」『歴史学研究』647、1993年、48-52頁
- 2) 「新刊紹介 小山正明著『明清社会経済史研究』」『千葉史学』23、1993年、73-75頁
- 3) 「1994年の歴史学界—回顧と展望—(中国 明・清)」『史学雑誌』104-5、1995年、231-241頁
- 4) 「中国明清時代史研究における「地域社会論」の現状と課題」『歴史評論』580号、1998年、40-53頁。中国語訳: 太城佑子訳「中国明清時代「地域社会論」の現状与課題」(台湾国立暨南大学歴史学研究所『暨南史学』2、1999年)
- 5) 「書評 岸本美緒著『明清交替と江南社会—17世紀中国の秩序問題』」『社会経済史学』67-4、2001年、93-94頁。
- 6) 「批評と紹介 井上徹著『中国の宗族と国家の礼制—宗法主義の視点からの分析』」『名古屋大学東洋史研究報告』26、2002年、109-121頁。
- 7) 「書評 孫江『近代中国の革命と秘密結社』」『法制史研究』58、2009年、278-285頁。

6. 口頭発表

- 1) 「中国移住民社会における地域秩序の形成」創立百周年第87回史学会大会、東京大学、1989年11月12日
- 2) 「清代四川之移住家族与地域社会—雲陽涂氏之個例研究」中国近世家族与社会学術研討会、台湾中央研究院歴史語言研究所、1996年6月26日
- 3) 「清末の反洋教運動と「善」の系譜」アジア民衆史研究会2005年度大会、専修大学、2005年7月30日
- 4) 「清代四川之移民家族与地域社会」宋以後宗族形態的演進与社会変遷国際学術討論会、天津南開大学、2007年8月30日
- 5) 「近代中国における「家族」と「国民」—流動する社会における忠誠のゆくえ—」「いまなぜ国民国家か—国民国家の過去・現在・未来: 人間文化研究機構連携研究「ユーラシアと日本」国際シンポジウム、国立歴

史民俗博物館、2008年3月2日

- 6) 「日本近世における漢籍輸入と明治維新」浙江工商大学日本文化研究所と千葉大学人文社会科学研究科学術交流協定締結に基づく記念講演、杭州浙江工商大学、2008年7月7日
- 7) 「地域与記憶—從丁治棠的《仕隱齋涉筆》看清末四川地方社会」中国社会史学会 第12回大会「政治変動与日常生活」国際学術研討会、中山大学、2008年11月15日
- 8) 「近代中国における「宗族」と地域秩序」名古屋歴史科学研究会2010年度大会、名古屋大学、2010年5月8日
- 9) 「革命イデオロギーの遠い水源—清末の「救劫」思想をめぐって—」中国社会文化学会2010年度大会、東京大学、2010年7月10日
- 10) 「東アジアの近世—清代中国における人の移動と秘密結社—」七隈史学会2010年度大会、福岡大学、2010年9月25日
- 11) 「生成する地域・地域意識—清末中国の地域社会—」歴史科学協議会第45回大会、立正大学、2011年11月27日
- 12) 「「善」と革命」辛亥革命百周年記念国際会議、東京大学、2011年12月4日
- 13) 「前近代の東アジアにおける「家」と社会」浙江工商大学五洲論壇、浙江工商大学、2016年3月15日
- 14) 「江戸の漢籍輸入から見る中日文化交流史」浙江工商大学東語講座、浙江工商大学、2017年3月15日
- 15) 「地域の記憶を記録すること—清代中国における地方史編纂と史料—」大阪歴史科学協議会2024年度大会、関西学院大学、2024年6月8日

7. 辞典・事典項目

- 1) 『近代中国人名辞典』(霞山会、1995年、担当項目「徳楞泰」・「額勒登保」・「林清」・「冉文儔」・「王三槐」)
- 2) 『歴史学事典』(第4冊、弘文堂、1996年、担当項目「同郷団体」・「同族意識」・「白蓮教徒の乱」)
- 3) 『歴史学事典』(第9冊、弘文堂、2002年、担当項目「会党」・「邪教 (の

山田賢先生を送る

観念)」)

- 4) 『華僑・華人事典』(弘文堂、2002年、担当項目「三合会」)
- 5) 『歴史学事典』(第10冊、弘文堂、2003年、担当項目「義兄弟」・「同郷会」)
- 6) 『歴史学事典』(第11冊、弘文堂、2003年、担当項目「白蓮教」・「一貫道」)